



沖縄キリスト教学院大学
沖縄キリスト教短期大学

学報

第 59 号

2013 年 3 月 発行



CONTENTS

- | | | |
|---------------------|------------------|-------------------|
| ● 理事長・学長あいさつ・P2 | ● 行事・P8 | ● 退職教職員メッセージ・P16 |
| ● 大学・大学院トピックス・P3 | ● 平和・キリスト教活動・P10 | ● 2012 年度人事・P18 |
| ● 短期大学トピックス・P4 | ● 国際交流活動・P11 | ● 寄付感謝報告・P19 |
| ● 大学・短期大学共催・P6 | ● 学生の活動・P12 | ● 2011 年度決算報告・P19 |
| ● 研究助成費獲得による研究活動・P7 | ● 活躍する卒業生・P14 | 表紙モデル |
| ● 就職支援・P7 | ● 同窓会・後援会・P15 | 2012 年度学生会の皆さん |



沖縄キリスト教学院
理事長 神山 繁實

「明日を目指して」

本学院は、建学の精神であるプロテスタント・キリスト教の教育理念を教育の基本に据え、地域・国際社会に貢献できる人材育成を実施する県内唯一のキリスト教高等教育機関であります。昨年 4 月より中原俊明学長をお迎えして、新たな大学づくりが始まりました。中原学長は、本学院創設の中心的役割を果たされた沖縄キリスト教団首里教会牧師仲里朝章先生の薫陶を受けられた今では数少ない信徒の一人です。琉球大学で定年を迎え、その後、鹿児島県の志学館大学で教鞭を執られた後、本学院大学・短期大学の学長に就任されました。今後のご活躍が期待されます。

一方、ランドルフ・スラッシャー教授が本年 3 月をもって退任されることになりました。先生は、大学卒業とともに、米国メソジスト教会の短期宣教師として本学院で教えられました。任期満了により米国に戻り、ミシガン州立大学で修士、博士号を取得後、再度来日され、関西学院大学、ICU の教授として任期を全うされ、2002 年 10 月から本年 3 月までの約 10 年間、本学院大学人文学部長として、また、大学の第二代学長を務められ、本学の英語教育向上に貢献されました。また、大学院の研究科長としてもリーダーシップを発揮されました。

先生は言語学のご専攻で、日本言語テスト学会を創設され、会長を務められました。この分野において先生は国内的に、また国際的にもすぐれたリーダーシップを発揮されました。キリスト教教育の面でも大きく貢献されました。心から感謝申し上げます。先生の業績等について、2012 年度本学『論集』に詳細が掲載されていますので、ご覧ください。

今日、基地問題の中でも深刻なことは、普天間飛行場に配備されたオスプレイの件であります。かつて、様々な悲惨な軍用機事故を経験してきた沖縄県民として、基地問題をトータルに考えてみる必要があります。「平和をつくりだす人は幸いである」との意味を、理念と現実の状況に重ね合わせて考えていく必要があります。この意味で、本学院の沖縄キリスト教平和研究所と大学・大学院における平和学の講座は、教育理念とその特質を示していると思います。

今後の課題として、本学院の財政健全化と教育内容を充実させるために、学生の質・量の拡大と深化を具現化していく課題がのこされています。日頃のご協力に対して感謝するとともに、今後も本学院関係者のご協力を切に願う次第であります。



沖縄キリスト教学院大学
沖縄キリスト教短期大学
学長 中原 俊明

「厳しい時代にこそキリスト教、沖縄、平和に立つ教育を！」

1. 2012 年 4 月 1 日に本学院の短期大学と 4 年制大学の学長を仰せつかつて、間もなく 1 年が経ちます。その間、皆さんからの支援と協力を受けながらも、試行錯誤の連続の中で仕事をしてきました。さまざまなレベルで大きな問題や課題があることを知らされてきましたが、何ができるか、何をすべきか、模索の日々が続きます。

2. 国レベルの問題として、教育の貧困（一方で日本の軍事支出は世界で 6 位、他方で教育への公的支出が GDP 比でみると約 30 の OECD 加盟国中で最下位、私立大学の 4 割が赤字経営で苦闘）、若者の内向き思考（日本からの米国留学生は激減して約 2 万人で、中国人留学生の約 10 分の 1）、卒業後の就職難と生活難（全労働者の約 40% が非正規雇用、若者の 2 人に 1 人は失業中か非正規雇用）等々。そんな背景のもと、去年 12 月総選挙で自公政権が復活しました。課題は山積していますが、これから世の中は良くなっていくのでしょうか。例えば、アベノミクスは国民を幸せにするのか、格差社会は緩和されるのか、きな臭い戦さへの道ではなく平和の可能性を高めるのか、東北の震災復興は順調に進むのか、原発の恐怖から国民を解放してくれるのか、沖縄の米軍基地の重圧や人権と人命への脅威を取り除いてくれるのか等々、戦争体験のないアクターたちの手でこの国が再び過去の過ちを繰り返すことのないよう切に願っています。

3. この国の歴史を振り返ると、何度かの過ちが見えてきます。今から一世紀以上も昔に、内村鑑三が「万朝報」に書いた「困った国」という題のエッセイがあります。その要点は、日本では正義を唱える者はあるが、行う者はいない。行う者は国賊とされて殺されてしまうからだ。不義によって立つこの国は正義の大敵である。そして解決策として「人を作らんかな、人を作って然る後に社会を改良せんかな。これ余輩の唯一の社会改良法なり」と。本当の意味で社会を変える力は教育にある、と喝破しており、教育に関わる者として鼓舞（encourage）される思いです。

4. わが学院は、55 年の歴史を有しますが、建学者である仲里朝章先生が首里教会の牧師をしておられた時、1960-70 年代にかけて私自身は一信徒として指導薫陶を受けました。先生は、戦時下で那覇商業学校校長として、皇民化教育に加担して教え子たちを死の戦場へ送った罪責感、また学徒隊を率いて体験した沖縄戦では自身も頭部に被弾して九死に一生を得た体験などを踏まえ、戦後沖縄の将来は、キリスト教主義の教育を受けた次世代の人達によって担われるべきこと、沖縄をデンマークのような理想郷にするため彼らを平和の実現者（ピースメーカー）として育てるという夢を託して本学院を創設されたと理解しています。この厳しい時代にこそ、キリスト教、沖縄、平和という先生のスピリットはぜひとも継承せねばとの思いを強くします。「・・・義と信仰と愛と平和とを追い求めなさい」（テモテ第二 2 章 22 節）

〔学 歴〕	1959 年 3 月	中央大学法学部法律学科卒業（法学士）
	1965 年 5 月	サザン・メソジスト大学ロースクール比較法学修士課程修了（比較法学修士 M.C.L.）
〔職 歴〕	1966 年 9 月	琉球上訴裁判所首席判事専属秘書
	1971 年 6 月	琉球大学短期大学部講師
	1974 年 4 月	琉球大学短期大学部助教授
	1980 年 4 月	琉球大学短期大学部教授
	1992 年 12 月	琉球大学短期大学部部長
	1993 年 10 月	琉球大学法文学部教授
	1993 年 10 月	琉球大学大学院法学研究科担当

〔職 歴〕	1997 年 4 月	琉球大学大学学長特別補佐
	2001 年 3 月	琉球大学 定年退職
	2001 年 5 月	琉球大学名誉教授
	2001 年 4 月	志学館大学法学部教授
	2006 年 3 月	志学館大学 定年退職
	2012 年 4 月	沖縄キリスト教学院大学・沖縄キリスト教短期大学学長
〔その他役職〕	2008 年 10 月～ 2011 年 10 月	学校法人沖縄キリスト教学院評議員
〔研究分野〕		民法法学

第4回5大学連携金融講義

本学と沖縄大学、沖縄国際大学、名城大学、琉球大学の5大学が連携して講義を行う第4回目の「金融理論と実務の基礎」が10月6日より開催されました。

金融の理論を各大学の教員が担当し、実践的な講義を銀行・証券の担当者が担当。講義の最終日はグループ毎の研究発表が行われ、共通テーマである「日本経済と金融の将来」について熱心な討論が行われました。

今回の参加者は各大学の合計20名で、本学より8名が参加しました。



教職課程

今年度、12名の学生が教育実習を行い、教員免許状を取得しました。1年生の段階では、50名程の学生が教職科目を履修しますが、免許取得まで教職課程を履修し続ける学生数は多くはありません。免許法の改正ごとに教職課程が充実し、学生にとっては履修科目数が増え、負担が増大しています。学生たちのさわやかな笑顔は、その大変さを乗り越えたからこそでしょう。



今後、彼女たちが、教育の世界で、あるいはそれ以外の世界で活躍することをお祈りします。

English Lunch Table

English Lunch Table は、昨年までと同様、学生たちの参加を得ており、常勤・非常勤の先生方と学生、また学生同士が英語で会話を楽しんでいます。リラックスした環境で学生が自分を表現することで、ランゲージスキルに磨きがかかります。さらに、先生方や学生たちが互いをよりよく理解するよいチャンスでもあります。10名もの学生が参加したこともあります。一部の学生については卒業研究論文で多忙のため、年度の終わりにかけて参加人数が少なくなる傾向にありますが、新年度では人数は再び回復すると予想しています。



学P 沖縄リーグ

沖縄ファミリーマート主催の「学P 沖縄リーグ 2012」の弁当部門に高崎ゼミの学生たち(代表 仲里真由美)が参加し、見事トップ賞を獲得しました。弁当部門でトップ賞を受賞したのは本学にとって初めての快挙となりました。

提案した弁当は男性をターゲットとした鶏肉・豚肉・牛肉をふんだんに使った「ワイルド」でしたが、予想以上に反響もよく、男性のみならず女性の方からの多数の支持も得られました。

商品開発からCM撮影、販促活動など1つの商品の誕生から終了までに携わり、普段の学校生活とは一味違った経験をすることができました。参加した学生たちもこれを機に一皮むけて成長し、今後の就職活動や学生生活においても、今回学んだ多くのことを活かしていくことが期待されます。



2012年度(第5回) 沖縄キリスト教学院大学大学院講演会

2012年11月3日(土)に、2012年度(第5回) 沖縄キリスト教学院大学大学院講演会を本学院 SHALOM 会館1-1教室にて開催しました。今回は上智大学外国語学部の渡部良典教授をお迎えし、「人間理解のための言語テスト研究入門」との演題で講演していただきました。学校教員、学生、通訳者、学校役員など、学内外から40名の参加者がありました。また、本大学院生・修士生及び本学院卒業生の5名と山里恵子特任教授が、外国人の参加者のために日英同時通訳を行いました。渡部良典先生は、学習と試験が持つ特質を比較しつつ講演を展開され、試験が教育と学習にインパクトを与える「波及効果(Washback)」に言及されました。試験が学習とモチベーションを高めるようにポジティブな波及効果のデザインを作り出すことにより、学習と試験が両立しうることを指摘されました。今回は聴衆参加型の講演で、課題が与えられ、グループで問題を考える時間がありました。参加者たちは先生のソフトな話し方に好感を得、先生が指摘された箇所を一緒に考えたり、意見を述べたりと、先生との知的な会話を楽しむことが出来ました。この講演を通して、我々は言語テストに対し、よりポジティブな理解を得ることができ、また、現場の先生方にとっては授業に生かせるよい内容の講演でした。



英語科

英語とはコミュニケーションツールであることを認識させる

Bridge Program とは、高校から大学への「橋渡し」のプログラムとして位置づけている、大学入学前学習支援です。今回の Bridge Program では、英語はコミュニケーションツールであるということを強調しながら、プログラムを組み立てました。第1回目では、英語をツールとして使うことを強調したエクササイズ（口語コミュニケーションと電子メール）でアイスブレイキングを計りました。次に、大学生に求められているものを早い段階から意識づけさせるために、3名の在学・卒業生（在学中に留学へ行った先輩、4年制大学へ編入した先輩、そして就職に向けて資格取得に励む先輩）によるスピーチ「キリ短英語科の学生になるとは」を聞いてもらいました。最後に本学院の成り立ちに関する学習を行い、第1回目が終了しました。第2回目は去年と同様に、大学講義に備えるための必要なスキルの学習に重点を置き、ノートテイキングの必要性とその演習を体験してもらいました。プログラム後半では、LL室へ移動し、シャドーイングを練習してもらいました。英語科では、週1回必ずシャドーイングを取り入れた授業があります。30分という短い時間内ではありましたが、参加者全員が集中して挑んでいました。第3回目は3月に予定しています。我々英語科は、高校生がこの3回の Bridge Program を受講することで、大学生になるという自立心を養い、スムーズに大学生活に適應してゆくものだと考えています。



英語科

English Comprehension

English Comprehension I・II は、2012年度から英語科が始めたクラスです。今までは、リーディングと文法・作文の2クラスに分かれていました。けれども、English Comprehensionのクラスには、読解、文法、作文、リスニングとシャドーイングが入っています。つまり、1つのテキスト、1つの素材を読み、内容を理解し、同時にそこに使われている文法を学び、かつ、その課で学んだ語彙や文法を使って作文し、また、音声として聞いたり、音声をアウトプットしたりする作業をしています。別々のクラスを作るより、こうするほうが、学生の理解が有機的に結びつくのではないかというコンセプトに基づいたクラスです。1つのクラスにつき、3名の教員が、読解、文法・英作、LL部門をそれぞれ受け持っていますが、連携を密にとって、学生の理解を確かめつつ授業を進めています。従来のクラス編成の場合と、どれくらい学生の能力向上の割合が違うかは、まだ始めたばかりなので不明ですが、しばらくこの試みを続けるつもりです。また、Iは1年生前期用、IIは1年生後期用ですが、それぞれ前期、後期の初めにブレースメントテストを実施し、学生の能力にあったクラスに入れるよう配慮しています。

保育科

親子ふれあい事業ワイワイプラザinキリ短（地域子育て支援実習Ⅰ/Ⅱ）



去った2013年1月19日（土）、今年度2回目となるワイワイプラザ（通称）が開催されましたⁱ。当日は、今年の最低気温（那覇 10.7℃）ⁱⁱを記録した前日とは違って変わり、天候にも恵まれ、本学をにわか子育て支援会場に6つのコーナーが設けられました。この日のために、学生たちはこれまでの学びを総動員し思考錯誤を重ねています。子どもの育ちにおいて、社会的に何が課題とされているのか。課題を解決するために学生として何ができるのか。丁寧な話し合いを積みあげ、具体化した学生なりの親子支援の形です。

同事業は2008年度に始まり、2011年度には本格的にカリキュラム化されました。その背景には、少子化とそこから派生する種々の問題があります。まずおとなの側からは社会全体の養育・教育力の低下、また子どもの側からは発達の偏りに対する指摘です。前者は、必ずしも保護者個人にのみ起因するものではありませんし、後者についても子ども個人に責任があるわけではありません。核家族化が進行し情報化が急速に浸透する中、身近に役割モデルがおらず、そのうえ氾濫する情報に戸惑う親たちの姿が浮かびあがります。子どもについては、「3間（時間・空間・仲間）の消失」といわれるように、家庭内の時間割化された生活、自然を含む遊び空間の減少、そして少子化や都市化に伴う遊び仲間集団の消失など、本来子どもの育ちを支えた環境そのものが大きく変化しています。そのため、かつては意図的な「教育」という営みなしに、自然に育まれていた諸能力が現在では育ちにくくなったと考えられるようになりました。

本学を巣立っていく学生たちも、これらの課題に直面しながら、自らの道を切り開いていくことでしょう。実践の場で求められる力を、同実習をとおして企画・立案・予算管理など、在学中2度経験できることは意義あることです。今回は、広報面でのハブニングがあり、「報告・連絡・相談」の大切さを改めて認識する結果となりました。しかし、このような失敗からの学びと合わせ、時には対立した意見の調整や気持ちのすれ違いの克服など、仲間と力を合わせてやり遂げた経験は、保育者としての人間形成の一助になったことと思います。子どもの育ちに責任をもち、子育て主体としての親のエンパワーメントⁱⁱⁱを大切に考え寄り添える、そして共に育ちあえる保育者へのヒントを各々が体得したワイワイプラザでした。



- i 毎年2回開催され、第1回は2012年10月27日（土）に行われました。原稿執筆時2013年1月末現在の記録です。
- ii 教育・福祉分野では、当事者の内発的動機づけを支え自己肯定感をもって自律的に子どもと向き合える力を引き出す手法として使われる言葉です。

保育科

保育所実習

保育科では保育所実習を2年次に2回行っています。保育所実習Ⅰは6月、保育所実習Ⅱは11月下旬から12月（それぞれ土曜日を含む80時間から88時間）に行われています。保育所実習Ⅰでは0歳児から5歳児まで観察実習を行いながら部分実習（絵本の読み聞かせや帰りの会など）を行い、保育所実習Ⅱでは、部分実習を重ねながら1日責任実習を行います。これらの実習を行った後に、反省会を行い、実習を振り返ります。その内容をすべて終了することで保育所実習は単位を取得することになります。毎回、実習では様々なことに注意する必要があり、体調管理や守秘義務など実際に保育士になって働く際にもとても重要なことでしょう。

保育所実習Ⅰと保育所実習Ⅱの実習時期が明確に分かれたことで、学生や実習園からよい反応が多く聞かれました。学生は実習の課題を明確に持ち、6月はハイハイしていた乳児が11月になると歩くなど園児の早い成長を実感し、保育所保育指針の発達段階がしっかり理解できたなどとコメントがありました。実習園からは、子どもへの対応など自ら行動できるようになったと評価を受けることができました。

保育所実習Ⅰ・Ⅱを通して学生たちは保育士として大きく成長し、巣立っていきます。卒業する皆さんは、保育の場で実践を積み立派な保育士になってくれることを心から期待しています。最後に保育所実習を受け入れご指導頂いた実習園の先生方にもお礼を申し上げます。

保育科

保育・教職実践演習

「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」により、短期大学においては、2011年度より教職課程を履修する学生に、教職に関する科目のひとつとして「教職実践演習」が新設されました。到達目標は、自己の課題を認識し保育者として求められる最小限必要な資質能力を形成することです。そうすることで教職生活が円滑にスタートできるものと捉えられています。学生たちは、1年次より履修カルテを作成し、自己の学習状況を自己評価し課題を認識します。また、講義、演習、実習をとおして保育者としての①使命感や責任感、教育的愛情、②社会性や対人関係能力、③幼児理解や学級経営能力、④保育内容の指導力など、保育者として必要な知識技能の修得状況を自己評価します。そして、自己の課題を認識し課題解決に向けて取り組みます。自己の課題や到達目標を視点においたフィールドワーク、グループ討議をとおして得られる仲間からの様々な意見、指導方法、幼



児理解、援助のあり方は、保育者としての資質能力の形成につながります。半年間の講義ですが、これまでの学びの総集として学生の育ちが見られる科目です。



総合教育系

第3回平和研修ツアー

総合教育系は、本学の「建学の精神」の学びをさらに深めるために本プログラムを考案しました。過去2回の研修では、沖縄本島中南部の戦跡を巡り、貴重な戦争証言も伺いました。今回は又吉京子氏（本学卒業生、沖縄キリスト教センター館長代理）の懇切丁寧なガイドを受け、北中城、北谷、嘉手納、読谷の戦跡、役場そして壕を訪問しました。戦争前の平和な島が、日本軍飛行場により要塞化し、沖縄戦を経て基地を中心に再建された経緯を学ぶと共に、基地反対を唱える行政や住民運動にも触れることができました。特に参加した学生にとり集団自決跡地のチビチリガマの訪問は印象的であったようです。特に親が子を、子が親を殺すという住民が極限状況に追い詰められた史実に接して、戦争の酷さと同時に平和を守る決意を新たにしました。研修後、英語科の一学生が自主的に次の感想文を提出してくれました。「私は小中高と毎年沖縄戦について調べる機会を与えられてきました。しかし、知らないことはまだ多く、情報は日々変化していることに気づかされました。（中略）今回参加して、人から話を聞くことは大切だと感じました。継続し続けて欲しい大切なツアーだと思いました。今後も学生達と共に史実を学び、「平和を創り出す者」を目指して研鑽を積みしたいと思います。」



総合教育系

第3回総合教育系特別公開講座

総合教育系では、昨年11月28日ローレンス・ウエイン氏（オークランド大学アジア研究学科上級講師）をお迎えし「琉球方言のおもしろさーシマ言葉の過去・現在・将来」と題する講演を開催しました。講演でウエイン先生は、①琉球方言の多様性（特に鼠の呼び名）、②その特徴的構文、③シマ言葉の将来という3つの観点からテーマにアプローチされました。つまり、①で先生は、鼠のことをマヤー（猫）と呼ぶ地域もあり、その語彙の多様性と面白さを紹介されました。②では、「A接ハB-Bスル」（例：ストウミティカラアッタブイッシ、フテハリハリソーイビータン[朝からスクールで、降っては止み、降っては止みしていました]）という特有構文の存在を伝えられました。③では、特に祖父母が幼児期の子供に方言を教えることにより、シマ言葉が存続してゆく可能性を指摘されました。講演後、フロアから質問を受けましたが、③に集中する内容でした。このことは、参加者が「方言存続」という課題に高い関心をもっておられたことを証しています。総合教育系では「沖縄研究系」講義の1つとして「アジア研究」を開設し、琉球方言の歴史、音や文体等を学生達に伝達してきましたが、今回の講演を通し、方言継承という一教育使命の重要性をあらためて実感させられました。



同時通訳集中講座

2012 年 8 月 2 日～9 日

本学の伝統的催しの一つであり、本学英語教育の特色にもなっている「同時通訳集中講座」が今年も開催されました。今年度は第 20 回目の節目となりましたが、これまで学内外から好評を頂いている内容に新しい取り組みを織り交ぜて、講座のさらなる発展を目指しました。今年は講座期間中に台風 11 号の本島直撃がありました。これまでは暴風警報発令中は休講・補講を余儀なくされ、受講生の訓練リズムがいったん途切れるなどしていましたが、今年は主任講師の宮田先生がお持ちのインターネット会議システムを活用することにより、なんと遠隔教育が実現。暴風雨吹き荒れる中、多数の受講生が自宅に居ながら演習を行うことができました。教室での授業そのままに、とはいきませんでしたが、受講生の皆さんの暖まった調子をキープするのに寄与したのではないのでしょうか。主任講師の宮田耀彰先生と本学講師陣に加え、昨年に引き続き関根マイク先生と玉城弘子先生にも授業をご担当くださり、幅広く豊かな内容の講座実現に協力を頂きました。特別講演会として、本学の Daniel Broudy 教授による“Framing Power in Post-War Okinawa”(戦後沖縄における権力と思考の枠組み)と題したレクチャープレゼンテーションを行いました。上級クラスの受講生はこの英語による講演と日本語・英語による質疑応答の同時通訳を担当し、貴重な実践訓練を体験することができました。



第 32 回学内英語弁論大会

2012 年 11 月 10 日

2012 年の学内英語弁論大会は、おそらく本学における英語の行事で最高のハイライト(目玉)だったといえるでしょう。ここ数年、この行事への参加者が少ない年もありましたが、今年は短大・大学(1 年次～4 年次)を代表して 11 名の学生が参加しました。膨大な課題や学園祭の準備などで多忙なこの時期に、人前でスピーチするための原稿を書いたり、発音や表現の練習をすることは大変な労を要しますが、そんな中、11 名の参加者が挑戦し大いに盛り上がりました。出席した教職員やご父母の方々は、一人ひとりのスピーチの純然たる質の高さに感動させられっぱなしでした。テーマは、沖縄人としてのアイデンティティに関する深刻な問いかけから、いじめられた記憶に基づく自らの経験を述べたもの、そして秘密を守れない女性特有の性質について述べた快活なテーマなど多岐にわたりました。事実、この厳しい競争の中で、見事 1 位を獲得したのは、ユーモアを交えながらも堂々とした姿勢で弁を振ったこの快活なスピーチでした。弁士はもちろん、会場の聴衆も一体となって楽しめる本学ならではの大会になりました。2013 年度もレベルの高い熱弁を期待しています！



1 位	小磯 絵梨奈 英語科 1 年	A woman can't zip her mouth
2 位	比嘉 周作 英語コミュニケーション学科 4 年	Work a Miracle
3 位	砂川 綾貴子 英語科 1 年	What I learned from comparing myself with others

第 24 回高校生英語弁論大会

2012 年 12 月 1 日

2012 年の高校生英語弁論大会は大成功をおさめました。県内の高等学校から 12 名の弁士が参加し、研ぎ澄まされ示唆に富んだ見事な演説を披露しました。今年の大会は、特に生徒一人ひとりが選択したテーマの質が非常に高く、さらに審査員をうならせたのは、そのような高尚なテーマに毅然と取り組む弁士の姿勢そのものでした。特に弁士たちはアイコンタクト、顔の表情、声の抑揚などが適切に行なわれていれば、大きなジェスチャーは不必要であることをよく理解したうえで微妙な表現を駆使しており、前年に引き続き、毎年着実に弁論のレベルが向上していることを実感させてくれました。第 1 位入賞は、「人生の黄金期」という演題で、聡明で感動的なスピーチを披露した沖縄尚学高等学校の上江洲仁美さんに贈られました。また、ベスト Impromptu 賞に輝いたのは、ネイティブスピーカーの先生による即興の質問に、自信を持って的確に答えた那覇国際高等学校の紺野貴瑛さんでした。弁士の熱弁に審査員、会場の聴衆たちが圧倒され、そして感動につつまれた素晴らしい大会でした。



1 位	上江洲 仁美 沖縄尚学高等学校 3 年	Our Golden Years
2 位	比嘉 萌子 球陽高等学校 2 年	Good Point of Being Positive
3 位	平安座 美央 那覇高等学校 3 年	The Importance of Knowing Your Own Culture
学長賞	照屋 李苗 開邦高等学校 2 年	Being a Family
Best Impromptu 賞	紺野 貴瑛 那覇国際高等学校 2 年	What Smile Can Do

Power of the Pen 高校生英語ライティング・コンテスト

今年の Power of the Pen (ライティング・コンテスト) も成功をおさめました。例年のように、本コンテストではライティング・スキルに注意を向け、優れたライティングと指導を実践する教師と学生に栄誉を表しました。選ばれた 3 編のエッセイは、図らずも同じ高校からでした。トピックは、暴力について、また攻撃的な物理的手段に訴えず問題を解決する方法についてでしたが、沖縄尚学高等学校の学生たちは、説得的な議論を見事に展開しました。最優秀から 3 位までの学生たちが、トピックについて注意深い考察をしていることをタイトル——“Stand up to Bullies,” “Use Your Hand to Hold, Never Hurt,” and “Understand the Differences.”——が映し出しています。受賞エッセイはどれもとても洗練され流ちょうであり、中心テーマと調和した展開が見られました。書き手がコンポジションを実践と研究から成る学術領域として深く認識していることを示すものでした。

1 位	TOGUCHI Sara 沖縄尚学高等学校 2 年	Stand Up To Bullies
2 位	ETO Mayumi 沖縄尚学高等学校 2 年	Use Your Hand to Hold, Not to Hurt
3 位	ONO Maika 沖縄尚学高等学校 3 年	Understand the Differences

研究助成費獲得による研究活動

沖縄キリスト教学院大学・沖縄キリスト教短期大学では、沖縄キリスト教学院特別研究助成費や外部資金による研究活動が行われています。2012年度の獲得結果は次のとおりです。

【沖縄キリスト教学院特別研究助成費】

- 希土類・コバルト化合物の輸送特性の研究（内間 清晴）
- ノルウェーの裁判員制度について（Norway's Lay Judge System）（A. David Ulvog）

【科学研究費助成事業】

- 〔継続〕4 離島における死生観教育の展開と展望を探る医学教育的研究（近藤 功行）
- 〔継続〕近代沖縄教育への思想史的アプローチのための基礎的研究（照屋 信治）
- 〔継続（研究分担者）〕役割語の総合的研究（本浜 秀彦）（研究代表者：大阪大学 金水 敏）
- 〔新規（研究分担者）〕交錯するまなざし—琉球・沖縄をめぐる欧米のトラベルライティングの総合的研究（浜川 仁）（研究代表者：琉球大学 山里勝己）
- 〔新規（研究分担者）〕近代日本における教育情報回路と教育統制に関する総合的研究（照屋 信治）（研究代表者：岐阜女子大学 梶山雅史）

【公益信託 宇流麻学術研究助成基金】

- 保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・大学につながる理科教育の改善について（照屋 建太）

【ひらめき☆ときめきサイエンス

～ようこそ大学の研究室へ～

- 医療・保健・福祉系の立場で必要となる精神障害者・回復者理解の重要性（近藤 功行）

ひらめき☆ときめきサイエンスは、科学研究費助成事業による研究成果を社会還元・普及するための独立行政法人日本学術振興会委託事業です。小・中・高校生が、直に見る、聞く、ふれることで、科学のおもしろさを感じてもらうことを目的としています。沖縄キリスト教学院大学では、2012年8月11日（土）に、近藤功行教授が'08年度、'10年度、'11年度に引き続き県内の高校生を対象として上記プログラムを実施しました。



プログラム終了後に受講生・スタッフ全員で記念撮影

就職支援



Facebook を始めました。就職に関するイベントやセミナーについて紹介しています。「沖縄キリスト教学院キャリア開発課」で検索してみてください！

社長の弟子入りツアー参加報告会

2012年10月18日

9月24日～28日にかけて東京都で実施された「元山和仁記念社長弟子入りツアー」に沖縄キリスト教学院大学3年次の福地宏達さんと島袋美樹さんが参加しました。同ツアーは東京中小企業家同友会が主催したもので、県内の大学から11名の学生が参加しました。都内で活躍する企業の経営者に同行し、経営理念や実際の仕事ぶりを直接学び、今後の就職活動に活かすことを目的としています。

参加報告会では「県外の経営者の考え方を知り社会の厳しさを実感した。就職活動にむけて気が引き締まった」と話していました。今後のお二人の就職活動でのご健闘をお祈りしています。



秋の進路セミナー

2012年10月30日

学生と教職員が一体となり、全学的に進路について考えるプログラム。基調講演には保育科出身の仲間あずみ氏をお迎えしました。学生時代に経験したこと、海外でのボランティア、現在の仕事に対するやりがいというお話から、自分の可能性を信じて新しい環境に飛び込むことの大切さを教えていただきました。

各学科のOB・OGを交えたパネルディスカッションでは、先輩方が失敗を繰り返しながらも仕事にチャレンジしている姿勢が伝わってきました。会場の学生たちは社会人として働くことの重みを感じながらも、輝いている先輩たちの姿に目を輝かせていました。

215名(四大87名、短大128名)の1年次が参加しました。

<参加学生の感想>

- ◆逆境に正面から向き合い、周りを頼り活かすことを学んだ。
- ◆先輩方の話を聴いて、苦しいことも楽しいことになると知り安心した。自分のやりたい事を絶対実現させたい。



入学式

2012年4月2日

沖縄キリスト教短期大学（第56回）、沖縄キリスト教学院大学（第9回）、沖縄キリスト教学院大学大学院（第5回）入学式が本学体育館で執り行われました。英語科95名、保育科108名、学院大学98名、大学院1名が期待に胸を膨らませて入学しました。

また、10月1日には、秋季入学式が本学チャペルで執り行われ、新入生3名（英コミ2名、英語科1名）、転入学1名（英語科）が入学しました。



スポーツデー

2012年4月21日

学生会・キャンプリーダー主催で新入生歓迎のスポーツ大会が行われました。天候不良により、中庭でのプログラムは中止し、体育館でバレーとドッジボールを行いました。各グループ揃いのユニフォームを着用し、優勝目指して白熱した試合が繰り広げられました。また、終了後はバーベキューやレクリエーションを行い、新入生同士の距離がグッと縮まった一日となりました。



新入生オリエンテーションキャンプ

2012年5月16日～5月18日

今年で45回目を迎える名物行事の新入生オリエンテーションキャンプが実施されました。毎年本キャンプでは1.建学の理念についてのオリエンテーション 2. アカデミック・オリエンテーション 3. 人間関係を深めるためのオリエンテーションを重点的に行っています。今年は天気が崩れ大幅にプログラムが変更となったものの、引率で同行した学生会・キャンプリーダーの協力等もあり、それぞれのプログラムを無事に執り行うことができました。金城重明先生の講演、集団自決跡地碑を見学する平和学習や海洋研修等が実施され、新入生はそれぞれのプログラムを通して交流を深めていました。





全学集会・七夕祭

2012年7月6日

今年の全学集会のテーマは「新入生オリエンテーションキャンプについて」でした。本学の伝統行事であるオリエンテーションキャンプを今後どのようにして進化させたらよいか、参加した教職員、学生で意見を出し合いました。夕方からは「七夕祭」が始まり、学生による歌やダンスが披露され、多くの学生が浴衣姿で参加し、大盛況で幕を閉じました。



キリ学

キリ短

第48回 キリ学祭

テーマ

「笑顔を世界へ ～smile to the world～」

2012年11月10日～11月11日

開会宣言と共に放たれたバルーン。本学学生による歌やダンス、ゲストアーティストによるライブの数々でステージは大盛り上がりとなりました。また、実行委員で作り上げた写真アートはとても素晴らしく、来場者の視線を釘づけにしていました。フィナーレではゲストアーティストのしおりさんと、実行委員の学生と一緒にしおりさんの代表曲である「Smile」を唄いました。来場者の方々も肩を組んで一緒に唄い、今年の本学祭のテーマでもある「笑顔」溢れる、とても感動的なフィナーレとなりました。開催中に来場者の方々から頂いた献金、また各出店ブースからも頂いた献金を合わせると総額57,557円になりました。この献金はティーダキッズプロジェクトとNPO法人MESHサポートに贈らせていただきました。来場された皆様、ご協力頂きましたスポンサー、地域の皆様、関係者の皆様、本当にありがとうございました。



平和・キリスト教活動

～宗教部・沖縄キリスト教平和研究所より～

宗教部 サマー聖書キャンプ

台風 15 号の影響で・・・

2012 年度のサマー聖書キャンプは本学学生 9 名、教職員 4 名、福岡女学院大学より派遣された学生 4 名の合計 17 名が参加しました。伊江島にて開催する予定が台風 15 号の影響で伊江島へのフェリーが欠航したため予定を変更し 8 月 22 日（水）～ 23 日（木）1 泊 2 日の日程で平和学習と、福岡女学院大学の学生達との交流等を行いました。沖縄キリスト教センターの又吉京子氏の案内で嘉数高台公園にて沖縄の米軍基地の問題について学んでいる最中、突然大荒れの天気になり高台の展望台の避雷針に落雷する衝撃を目の当たりにしました。今回のキャンプは、米軍基地問題や沖縄戦についての学び、福岡女学院の学生達との交流だけではなく、神様の創られた自然の脅威と日常の豊かな恵みを感謝するときとなりました。



宗教部 クリスマス礼拝

琉球語（ウチナーグチ）で聖書朗読

12 月 21 日（金）に行われた 2012 年度のクリスマス礼拝では、英語・インドネシア語・中国語・韓国語・フランス語・スペイン語・日本語に加え、6 名の学生が、よきサマリヤ人伝道所の山里勝一牧師に翻訳していただいた琉球語の聖書朗読を行いました。その後、金永秀宗教部長から「キリストを拝むために」という題でクリスマスメッセージがありました。礼拝の最後には毎年クリスマス礼拝でご奉仕をしてくださる那覇シティアンサンブル（指揮：真栄城隆司名誉教授）の弦楽演奏とチャーチオルガンの奏楽（糸洲のぶ子先生）に合わせ、40 名の学院聖歌隊と『キリスト教芸術』クラス受講生によるメサイアのハレルヤコーラスの歌声がチャペルに響き渡りました。



宗教部 後期キリスト教週間プログラム

沖縄と東北を繋ぐプログラム

2012 年 12 月 3 日（月）～ 7 日（金）後期キリスト教週間では、本学の大切な全学行事である「キリスト教講演会」に茨城県より許伯基（ほべっき）先生（在日大韓基督教会つくば東京教会牧師）を御招きし、「被災地で教えられたこと～祈り、行い、生きる」という題で聖書の言葉と被災地の現状・支援状況について御話いただきました。また、期間中、学生宗教委員と Act for 東北の学生が中心となって、岩手県陸前高田市広田小学校の仮設住宅で生活される皆さんへのクリスマスプレゼントを贈るプロジェクトの募金活動やクリスマスグッズの販売を行い、12 月 19 日（水）に学生の手作りカードと沖縄県産お菓子や飲み物を送りました。



研究所 沖縄キリスト教平和研究所

2012 年を顧みる

所長 大城 実

「沖縄における教会の歩み―苦難の中での平和への願い」第二シリーズは講師の皆さんのご協力を戴いて計画通りに実行することができた。詳しくはニュースレター第 3 号参照。日本キリスト教団沖縄教区の第二世代の牧師達が沖縄教団時代の自己理解について協議を始めている。連続講座の思いがけない余波だったかも知れない。

関係団体との共催講演会がいくつかあった。5 月には憲法に関する講演と映画会を行った。講演は中原俊明学長にいただいた。憲法はそもそも政治家を含め行政に携わる者への制約だと言われた事が印象に残っている。その憲法を変えようとの動きが喧しい。而も自分たちの動きやすい方向への改悪である。この動きは断じて阻止しなければならない。キリスト教平和研究所だからこそ、平和憲法を守る事を 2013 年の優先課題としたい。沖縄宗教者 9 条ネットワークの活動に期待したい。

沖縄キリスト教平和研究所・連続講座 I
戦後の沖縄における教会の歩みと回顧
―苦難の中での平和の願い―

2012 年 8 月発行





ハワイ研修・海外幼児教育研修

カウアイ島：ハワイで4番目に大きな島

国際平和文化交流センターでは、春季海外研修として約2週間の「ハワイ研修」、「海外幼児教育研修」を実施しています。(2012年度研修日程：2013年2月12日～28日)

本学の研修は、協定校ハワイ大学・カウアイコミュニティカレッジ(カウアイ島)でのプログラムを中心に、学んだ英語をコミュニケーションの手段として使い、ハワイの伝統文化を体験し、異文化を理解することを目的としています。また現地学生との交流や、ホームステイを通し、ハワイの温かいホスピタリティを感じることができます。さらに、各研修に特化して、英語コミュニケーション学科・英語科学生が参加する「ハワイ研修」では、ハワイの観光ビジネスについて学び、保育科学生の「海外幼児教育研修」では、ハワイの

幼児教育施設を見学します。両研修プログラムの中には、ハワイ独自の言語を守るため、ハワイ語のみで保育園から高校まで一環教育を行なっている教育施設見学があります。

多文化が共生しているハワイには、独自の文化継承にかけ、る現地の人の努力がみられます。また、沖縄からの移民が沖縄に暮らしている人以上に、ハワイの地で、沖縄文化を大切にしている姿を目にします。

海外研修への参加を通して、学生自身が、世界を視野に自分を見つめ直し、気づき、学び、自ら行動できることを期待して、国際平和文化交流センターは、海外研修をサポートしています。



幼児教育施設にて、沖縄文化を披露



研修修了式に、ホストファミリーと



リゾートホテルの見学

ESD 研修会・シンポジウム

本学は ASPUnivNet^{※1} に加盟した 2011 年以降、ユネスコスクール^{※2} の普及と ESD 推進のための ESD 研修会・シンポジウム開催などに取り組んでいます。

今年度開催した講演ではアジア・アフリカの農村指導者を長年にわたって育成してきたアジア学院(栃木県那須塩原市)の荒川朋子副校長をお招きし、「生活の中心に食を置く“Foodlife”」をテーマに、「いのち」の観点から「農」と「食」を見つめ続けてきた同学院の活動や、東日本大震災をきっかけにした原発事故、放射能汚染問題に、アジア学院がどのように対応されてきたのかなどについて幅広くお話いただきました。シンポジウムでは、荒川氏のご講演を踏まえた上で、パネリストの方々に加わっていただき、それぞれ沖縄県内の「食」と「農」の現状について報告していただきました。続くディスカッションでは、農業体験などをどのように ESD 推進につなげられるかなどについて議論したほか、教育関係者を中心としたフロアの参加者からも熱心な質問が寄せられました。

第2回 ESD(持続発展教育)研修会・シンポジウム

「食と農を考える」

日 程：2012年12月13日

講 師：荒川 朋子氏(アジア学院 副校長)

パネリスト：大島 順子氏(琉球大学 観光産業科学部 准教授)

島袋 良太氏(琉球新報社 記者)

新里 渡 氏(農家)

コーディネーター：本浜 秀彦(本学国際平和文化交流センター長)



※1 ASPUnivNet とは

ユネスコ憲章に示された理念(教育・文化活動等を通じて世界の平和や安全に貢献すること)を学校現場で実践することを目的として設立された「ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワーク」を支援するための大学間ネットワークです。

※2 ユネスコスクールとは

ユネスコ憲章に賛同し、平和や国際的な活動を連携して実践する学校で世界180カ国で約9,000校以上の学校が加盟しています。日本全体でも550校(2012年12月現在)の幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び教員養成系大学がこのネットワークに参加しています。

学生の活動 ～自ら考え行動するとき～

東北支援

学生の活動①：Act for 東北

支援の輪を広げる

私たちは、東日本大震災に際して立ち上げた東北復興支援団体です。県内では、被災地への支援活動として、支援物資集めや募金活動、また被災地で活動されている方を招いての講演会開催などにより被災地の状況の周知活動を行っています。

被災地での活動としては、これまで約20名程度の学生を宮城県仙台市、石巻市へ派遣してきました。現在の活動としては投げ銭的な支援となってしまうよう、支援物資やクリスマスプレゼントを宮城県広田小学校の仮設住宅の子供たちへ送るなどしています。私たちが、これからの目標としているのは「支援の輪を広げるような活動」であり、被災地の現状を知ってもらい、沖縄からボランティアの増加を後押しできるような活動を考えています。

継続的な支援として、これからも学生の派遣を続け、今なお被害に苦しんでいる方々へ少しでも貢献できるような取り組みをしていきます。



沖縄戦の歴史

学生の活動②：TEAM 琉球

沖縄戦の歴史から平和活動へ

TEAM 琉球は、2011年に結成しました。結成当時は、学校の図書館で沖縄の歴史を一から調べ、ガマやグスクなどを訪れて、学ぶことが多かったです。最近では、その学んだ内容を活かして、本土から沖縄に来た修学旅行生に対するガイドや6月23日：慰霊の日に行なわれる集会などに参加して自分たちの活動の場を広げています。また3月には伊江島合宿を行ないます。伊江島にある戦跡を巡りながら、新しく入ったメンバーに沖縄や沖縄戦の知識を増やしてもらうための勉強会・交流会をします。今は、沖縄戦の歴史を残すための活動で「ウムイ事業」というものに参加しています。県と合同で、沖縄で起きた戦争がどのようなものだったのか、平和記念資料館に残る資料を映像として撮影するのを手伝っています。

これから私たちはどんどん活動の場を広げていきたいと思っています。



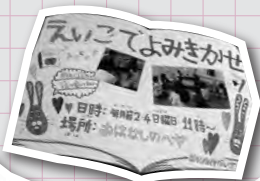
英語読み聞かせ

学生の活動③：ボランティアグループ NIC (Nishihara International Club)

The bridge between English and Children

NIC は本学の学生を中心に活動しているボランティアグループです。英語を身近に感じてもらい、それによる異文化理解への橋を架けるという目的の下、2011年の6月から西原町を中心に活動を開始しました。

主な活動として英語絵本の読み聞かせを町立図書館で月二回行っています。それに加え、クリスマス等の行事ごとのイベントや、グループ独自のイベントである英語村やバザー等を通して自発的に活動を広げています。このような活動方法に限らず、ワークショップへの参加や中央公民館での英語講師を務めるなど、地域との繋がりを重視し活動しています。将来的には、これまでの読み聞かせやイベント活動を継続しつつ、新たな活動の場として保育園や幼稚園にて英語絵本の読み聞かせを行っていく予定です。



ゴルフ優勝

学生の活動④：友寄 隆登

英語コミュニケーション学科 1年

第9回沖縄県学生ゴルフ選手権大会男子大学生の部優勝

私は9年間ゴルフを続けており、夏に行われた沖縄県学生ゴルフ選手権での優勝は大きな自信となりました。今まで努力してきた成果、自分自身の目標が達成でき、大変嬉しく思います。また、私一人の力ではなく両親や周りでサポートしてくれるみなさんのおかげで優勝できたと思い、大変感謝しています。これからも感謝の気持ちを忘れず、満足という言葉を忘れ、常に上を目指し頑張っていきたいと思っています。また、ゴルフだけではなく、勉強も忘れず頑張っていきたいと思っています。



海外公演

学生の活動⑤：大田 優希 英語科 1年

沖縄歌舞劇団 美 (ちゅら) ロシアツアー 2012

私は11月から12月にかけての17日間、沖縄歌舞劇団 美のロシアツアーに参加しました。ロシアでは、サンクトペテルブルク、トヴェリ、モスクワ、ヤロスラウリ、エレクトラスターリの5都市を回り、沢山の方々に沖縄の芸能を披露する事が出来ました。最初は沖縄の芸能が受け入れられるかとても不安でしたが、私達の沖縄を愛する思いは言葉が通じなくても観ている方に伝わるし、その思いが結果として、お客様からスタンディングオベーションや大きな拍手として返ってきた時にその不安は一気に喜びに変わりました。今回のツアーを通して、もっと沖縄の芸能を世界に広めていきたいと思いました。4月に沖縄で凱旋公演を行うので、興味のある方はぜひ！





沖縄キリスト教学院大学
准教授 **新垣 友子**
英語科 32 期

キリ短でもらった「自信の種」

キリ短を卒業して桜美林大学へ編入した私は、卒業後、悩んだ末に獨協大学の大学院に進学。そこで言語学という学問に出会いました。言語学に出会った私は学問に目覚めた、といえたら、かっこいいのですが、実はすぐさま逃げ帰りました。難解な専門用語を話しながら、何時間も勉強会をする不可解な世界についていけず、4 月入学後、5 月の連休には沖縄に舞い戻りました。しかし、あっけなく比嘉健次郎先生（短期大学名誉教授）に追い返されて逆戻り。何とか食い下がり、修士 2 年目にウチナーグチを論文のテーマにすると決めてから私の人生は変わりました。修士に 3 年かける決意をし、ウチナーグチをイチから学びました。大学 4 年の時、奇跡的に教員採用試験に合格していましたが、進学による保留は 2 年間だったため、高校教員になる切符は手放しました。「バカなことをした」、という人もいましたが、後悔したことはありません。

それからキリ短で英語を教えながら、研究を続け、結婚、出産、留学、と目まぐるしい 20 代後半でした。夫と当時 1 歳 4 か月の息子と渡英。スコットランドのエディンバラ大学大学院の博士課程でさらに言語学を学びました。（その時の苦労は涙なしには語れません。）帰国後、コソコソ調査・研究を続けるも

の、仕事や育児との両立など様々な障壁で研究は難航し、休学、復学を繰り返しました。10 年以上たった 2010 年にやっと論文が完成。2011 年に博士号を取得しました。現在、博士論文を加筆・修正中で、オランダの出版社から研究書を出版する予定です。

キリ短時代には徹底的に「自信の種」を植え付けてもらいました。そのおかげで「やってみれば、できるのではないか」という気持ちでチャレンジを続けることができ、その結果が積み重なって「自信」が芽吹きました。今思えば、先生方が本気で学生たちの可能性を信じてくれていたのだと思います。今、私はワクワクしながらウチナーグチ復興に向けて次のチャレンジに臨んでいます。

略歴

1990.3 ~ 1995.3	沖縄キリスト教短期大学卒業。桜美林大学編入学・卒業。その後、獨協大学大学院に進学、修士号取得。	2000.10	帰国。キリ短や沖縄大学で非常勤講師をしながら研究を継続。
1995.4 ~ 1998.3	沖縄キリスト教短期大学非常勤講師	2004.10	沖縄キリスト教学院大学専任講師となる。
1998.6	英国に留学。エディンバラ大学大学院博士課程入学。	2008.5 ~ 2008.9	科学研究費の助成を受けて、エディンバラ大学にて海外研究。
		2010.11	博士論文提出。博士号取得 (2011. 7)。



沖縄科学技術大学院大学
発達神経生物学ユニット
こども研究所
研究員
島袋(永井) 静香
英語科 36 期

自分の可能性を信じて

振り返ってみると、沖縄キリスト教短期大学で学んだ 2 年間は、将来私が進む道を切り開く出発点でした。その頃の私は、「自分は将来社会のために何ができるんだろう」、「努力をすることで自分の希望する道は開かれるのか」、そのようなことを常に考えていたような気がします。いろいろなことに挑戦したい自分と、自信のない自分が常に葛藤していた時期だったと思います。

キリ短在学中から将来は海外で勉強してみたいという強い思いがあり、TOEFL の勉強に力を入れていました。卒業後はアイオワ州のノースウェスタン大学へ留学し、その時受講した心理学の講義の中で、子どもの心の発達分野に関心を持ちました。同大学の留学を終えた後、キリ短大の学生部で働きながら、基地内のメリーランド大学に通い心理学の学部課程を修了しました。その後、沖縄県国際交流・人材育成財団の国費奨学金を頂くことができ、念願だった心理学の先進国アメリカ・ミシガン州立大学大学院に進学して家族療法を学びました。主に学童期の子どもの発達について研究し、セラピストとしても多くの事案に携わりました。4 歳からうつになる子どもがいるという現状に衝撃を受け、共通の問題を抱えている子どもたちの行動と環境との関係について調査し、支援や治療に役立つ情報を発信することができればという思いで、子どもの発達に携わる研究者としての道を選択しました。

2010 年 9 月から現在の沖縄科学技術大学院大学、発達神経生物学ユニットの研究員として、注意欠陥多動性障害(ADHD)の研究に携わっています。現在取り組んでいるのは、ADHD 児童の保護者に向けた支援プログラムの開発です。日本ではこの分野に関する研究はまだ発展途上で、私自身も試行錯誤しながら日々研究に取り組んでいます、やりがいのある仕事をしていると実感しています。

私は学生時代、優等生だったわけでもないし英語がとびぬけて上手く話せたわけでもありません。しかし、今、自分なりに充実感を持って毎日を過ごしているのは、自分の可能性を信じて地道に努力し続けた結果だろうと思います。皆さんも自分の可能性を信じて道を切り開いていってください。

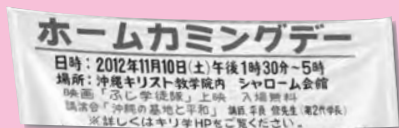
略歴

1994. 3	沖縄キリスト教短期大学(英語科) 卒業(第 177041 号)	2002. 5	メリーランド大学 (心理学部) 卒業
1997. 5	ノースウェスタンカレッジ (社会学部) 卒業	2010. 8	ミシガン州立大学 大学院 家族療法 修士・博士課程終了
1997. 7 ~ 1999.1	沖縄キリスト教短期大学 非常勤事務 (学生課 国際交流担当)	2010. 9	沖縄科学技術大学院大学 発達神経生物学ユニット こども研究所 研究員として、子どもの ADHD の研究に励む。

同窓会 後援会

創立 55 周年 ホームカミングデー

2012 年 11 月 10 日 in SHALOM 会館



第2部は平良修先生(第2代学長)の講演会。演題を『沖縄の基地と平和』、副題に「基地を沖縄の精神的風土にしてはならない」でお話し下さいました。普天間基地や辺野古に駆けつけ、抗議活動を精力的に続けておられる平良先生ならではの、静かなしかし熱い思いが伝わる講演でした。また、次回にも平良先生の講演会をリクエストする同窓生の方々もいて、皆さん学生時代の講義を思い出して心地よい緊張感と、「沖縄の基地問題」を再認識する機会になった講演会でした。

第3部は交流会で、同窓生・学院関係者・元教職員の皆さんやご家族の方々など、総勢 100 名余の参加があり、生演奏の BGM つきでケーキやコーヒー等を食しながら楽しいひと時を過ごしました。ミニ余興で 1990 年制定の校歌が紹介されましたが、前里光信副会長(8 期生)が完璧に歌われたのには驚きでした。また、なの会(保育科 7 期生)の皆さんが、ホームカミングデーを盛り上げようと、会場に自作の絵画や写真・書やパッチワークなどを持参、展示して下さい手作り感満載で温かい雰囲気の会場となりました。短い限られた時間の交流会ではありましたが、同じ空間を共有した仲間意識は年齢差を越えて和気あいあいとした懇談がなされ、学院の更なる発展のための支援を確認して盛会裏に閉じました。

同窓会では、会員相互の親睦を図ることが目的の一つにありますが、幅広い年齢層の交流は同窓会ならではのことで、イベントへの参加はご年配の方々が多く、若い会員層の継続的かつ積極的な参加で、会の更なる活性化・充実化が期待されます。

また学院及び在学生の支援を行なうことも同窓会の目的です。これは後援会の事業目的の一つでもあります。卒業と同時に新規同窓会員となる学生の皆さん、是非、学院の維持発展のために知恵と力を出し合い、共に協力し進めていきましょう。同窓会では若い皆さんの参画をお待ちいたしております。



同窓会からのお願い

同窓会ではデータによる会員名簿の整備を進めています。

① 住所 ② 氏名 ③ 電話番号 ④ 勤務先 の変更等をお知らせください。

【連絡先】 同窓会事務局 電話/FAX: 098-946-1280 E-mail: dousoukai@ocjc.ac.jp

同窓会 会員名簿

住所: 〒○○○○○○○○○

氏名: ○○○○

電話番号: 123-456-7890

勤務先: ○○○○○○○○



沖縄キリスト教学院大学
英語コミュニケーション学科
教授

Randolph H. Thrasher

私の人生を変えたとき

3月が終わると私は53年間に亘る教師の職を辞することになります。この53年間の内、最初の3年と最後の10年を本学院で過ごしました。どちらの時も、とりわけ最初の3年間は特に、私の人生を変えるような経験となりました。大学新卒者として、この地で教師としての3年間の契約を満了することができるかどうか疑問に思いながら、私は沖縄へとやって来ました。それまで私は日本での生活や、教職を生涯の仕事とすることを、全く予期していませんでした。しかし、その3年後に私は妻を伴い、そして、英語という言語をさらに学ぶために大学院へ進学するという決意と共に沖縄を去りました。つまり、その頃には私はもう教えることに夢中になっていたのです。

53年前、この場所で、私はそれまでとは異なる——国のために命を捨てるのではなく、平和を創り出す者となるべき学生たちを育て、そして卒業後は沖縄そして世界で積極的な役割を果たすための技能を教え、その資質を伸ばすための教育を提供するために、本学院を創始する原動力の一部となり得たことにとても感謝しています。神の御恵みにより、2つの異なる機会において、本学院における新たな教育の冒険に関わることができました。まだ首里教会で授業を

行っており、様々なプログラムとアクティビティーをゼロから生み出していた1959年から1962年にかけて、私は本短大の2期、3期、4期、5期生を教えました。それから42年後には、私は沖縄キリスト教学院大学と沖縄キリスト教学院大学大学院の設立を手伝うことができました。いずれの時も、教職員と協力し合って素晴らしい教育プログラムを造り上げることに誇りを持った、非常に積極的な学生たちと一緒に働くことは、刺激的で深い充実感がありました。

私は複雑な気持ちで退職します。本学での最後の10年間に成し遂げることでできなかった事柄を思うと悲しくなります。けれども、私が関わったいくつかの取組みが、本学を前進させる手助けになったことを知ると、多少の満足感を得ます。日本の小さな私立大学にとっては厳しい時代ではありますが、本学院創設時に仲里朝章先生が強い信念を持って掲げた目標に向かって、本学院のすべての関係者がもう一度専心し、そして仲里先生が思い描いた革新的な教育を提供し続けることを見据えて協働することが私の希望であり祈りです。

Life-changing experience

At the end of March I will step down from a teaching career that has spanned 53 years. The first three and the last ten of those years have been spent at this school. Both of these times, but especially the first, have been life changing experiences for me. I arrived in Okinawa as a fresh college graduate wondering if I could fulfill my three year contract to teach here. I certainly had no expectation of spending my life in Japan and making teaching my life work. But I left three years later with a wife and a determination to go to graduate school so I could learn more about the English language that I was, by then, committed to teaching.

I am very thankful to have been here 53 years ago to be a part of the pioneering effort of the Gakuin to provide a different sort of education—one that prepared students not to die for their country, but to be peacemakers and also taught them the skills and helped them develop the character they need to play a positive role in Okinawa and the world after graduation. By the grace of God I was able to be part of this new educational adventure on two different occasions. From 1959 to 62 I taught the 2nd, 3rd, 4th, and 5th graduating class of the junior college when we were still holding classes in Shuri Church and creating the various programs and activities of the school from scratch. Then, 42 years later, I was able to help with the establishment of Okinawa Christian University and Okinawa Christian University Graduate School. Both times, it was exciting and deeply fulfilling to work with highly motivated students who felt pride in working with the faculty to create unique educational programs.

I retire with mixed feelings. It makes me sad to think of the things that I have not been able to accomplish in the last ten years here. But I can feel some satisfaction in knowing that some of the actions that I have been a part of have helped move the school forward. But it is a difficult time for small private schools in Japan and it is my hope and prayer that all members of this school community can rededicate themselves to the goals set out so forcefully by Nakazato-sensei at the time of our founding, and work together to see that this school continues to provide the innovative education that he envisioned.





沖縄キリスト教短期大学
英語科
講師

James A. Ross

本短大での私の教育活動

私は、沖縄キリスト教短期大学で教員をすることができて、とても幸せだったと感じています。大学院を修了して沖縄へ戻ってきた時、私は英語教師になるつもりはありませんでした。しかし、米国総領事館の要請により、那覇の専門学校で非常勤講師を始め、そこでキリ短英語科の非常勤講師をしていたサンフォード・テイボン氏に出会いました。彼が私をキリ短へ紹介してくれたのです。

旧首里キャンパス時代の1982年に、私は本短大の非常勤教員として働き始めました。最初に教えたのはいくつかの上級英語クラスで、学生たちの英語力の高さに本当に感動しました。私自身、教えることを大いに楽しみながら学生たちに、英語を通して国際的な結びつきが最も大切だと伝えることができたと感じていました。本短大が西原キャンパスへ移転した1989年から、私は口頭英語のクラスも教え始めました。原喜美学長のもとで、私はキリ短の常勤教員となり、国際交流室長に任命されました。原学長はミシガン州立大学とハワイ大学コミュニティ・カレッジズにおける海外研修プログラムに着手し、全ての学生たちへ素晴らしい海外体験の機会を提供することとなる独自のプログラムを始動させました。当時のキリ短英語科は、毎年300名を超える入学者がいました。私はまた、英語科長も一期務めました。

学生たちは常に私の関心事の中心を占めており、そして私は学生たちと共に学び、共に成長しながら、よい関係を築いてきたと思います。本短大のクラスの素晴らしさは、単に私の個人的な印象というわけではなく、他の学校でも教えている多くの本短大非常勤講師からも聞かれることでした。沖縄でビジネスを展開している米国人のコミュニティでも、多くの知人が本短大卒業生の英語力の高さに非常に感銘を受けていました。

本学院の運営にあたって、事務職員の陰の力はとても大きいと思います。日々、教員や学生たちの訴えに耳を傾け、可能な限り最善を尽くし、問題を円滑に解決する努力を続けています。事務職員の皆さん頑張れ！！

今、私は、大学院が早い時期に設置されたこと、そして今後の短大や大学のプログラムを案じています。一般的なりベラルアーツ大学の時代は終わり、これからは教育の中心に焦点を合わせていくべきだと考えます。昨今では英語を教えるだけのプログラムは成り立たないと思うからです。本学院は他の組織と組むことによって学生たちに多種多様な教育のオプションを提供し、資格や学位を与えることが望ましいのではないかと思います。又、可能ならば保育科の4年制プログラムも推進して頂きたいと思います。本学院が、素晴らしいプログラムを提供していくことで沖縄を良き方向へと導く未来のリーダーが育っていくことを期待いたします。

本学院でみなさんと働いた経験は、私にとって有益で忘れられないものであり、私自身を定義するものとなりました。

My Education at OCJC

I consider myself very fortunate to have been able to teach at Okinawa Christian Junior College (OCJC). When I returned to Okinawa after finishing graduate school, it was not my intention to be an English teacher, but I began teaching part-time, at the request of the U.S. Consulate, at a vocational school in Naha, where I met Mr. Sanford Taborn, of the English Department at OCJC, who was also working there part-time. He introduced me to OCJC.

I began teaching part-time at OCJC in 1982 at the old Shuri campus. I first taught some advanced English classes, and was positively impressed by the high level of English of the students. I found that I enjoyed teaching a great deal, feeling that it was part of a greater scheme of offering international relations to students. When OCJC moved to the Nishihara campus in 1989, I began teaching OE classes. I started working full-time at OCJC under President Kimi Hara. She appointed me International Exchange Coordinator. President Hara initiated overseas study programs with Michigan State University and the Community Colleges of the University of Hawaii, unique programs that provided all students a great opportunity to gain international exposure. At that time, the English Department had yearly enrollments of over three hundred students, and I also served one term as the English Department chair.

The students have always been the center of attention in my thinking, and I believe I have had a good relationship with them in learning and growing together. Teaching great classes here at OCJC not only impressed me, it was also the thinking of many part-time teachers here who also taught at different schools. Many people I know in the local American business community also have been greatly impressed with the English level of our graduates.

I know that the biggest secret to running this school is the office staff. They are the unsung heroes; the administration and many times the teachers just get in the way. At times the office staff has to listen to the self-absorbed outspokenness of the faculty, yet field the honest complaints of students, and still try to make the best of it, trying to smooth the problems out. GAMBARE staff!!

I am concerned that the graduate school was established too soon, and worry about the future of our 2-yr and 4-yr programs. The era for a general liberal arts school is over, and there must be greater concentration on what is offered in the respective curricula. Nowadays, no program can stand alone on teaching just English. I believe the school should not be a stand-alone entity, but associate or partner with other organizations to offer a wider menu of specific certificates and degrees to offer to a broader spectrum of students/learners. I also would support the Early Childhood Department evolving into a 4-year program. I hope that this school will be forward-looking and develop innovative programs that will lead to the betterment of Okinawa, and foster future leaders that would take us there.

Working with the people at this school has been a beneficial, unforgettable experience and it has helped define who I am.

退職教職員メッセージ



沖縄キリスト教学院
常務理事

仲門 勇市

魅力ある大学づくりに期待

小生が学校法人沖縄キリスト教学院にお世話になったのは、2004年11月に元理事長の大城進一さん、現理事長の神山繁實さんから大学院を作るのでお手伝いをしてくれないかと声を掛けていただきました。小生はこれまで国立機関等を歩んできたのではじめての私立大学勤務であり、少々不安がありましたが、皆さんのお力を借りれば何とかできるだろうと安易な気持ちで引き受けました。

非常勤職員の専門嘱託員として採用され、理事長及び学長の特命事項を担当することになりました。当初は、大学の歴史及び寄附行為並びに学則等から建学の精神がどのように規定活用されて活かされているのかをマスターチェックすることから業務をスタートしました。それ以来8年余お世話になり、有難うございました。その間、小生が関わった業務等について、簡潔に記述したい。また、その評価については、読者の皆様のご意志にお任せしたい。

創立50周年記念事業については、まず、創立50周年記念行事実施推進本部設置規程を立ち上げ、記念実施本部を置き、その下に式典担当、音楽演奏等担当、祝賀会担当、総務・広報・記念植樹等担当、記念写真等担当、施設整備担当、記念事業募金担当の部会を設置し、それぞれ部長の下に具体的な事業内容を定め、速やかに実施に当たった。記念式典・祝賀会は、チャペルと体育館で多くの来賓、教職員、学生、同窓会会員の出席の下で盛大・盛況に終えました。また、創立50周年記念誌刊行については、創立50周年記念誌編集委員会を図書館長の下に立ち上げ、図書館長を中心に編纂さ

れ記念誌を刊行しました。施設等の整備については、現キャンパスに移転して以来初めての校舎等を建設することになり、本学の建学の精神をハードの面でどのように活かすかを主たるテーマとして捉え、学生、教職員の声を下に業者と協議しながら建設に当りました。会館の名称は、神山理事長に命名をお願いし、「シャローム会館」と命名されました。また、事務職員の事務執行の増進、大学の活性化を図るために法令事務職員研修会を立ち上げました。その研修内容は、学校教育法、私立学校法、大学設置基準、本学の寄附行為、学内諸規程等の解釈、制定等事務、さらに大学における事務職員の役割とは何か、学生募集戦略とは・・・、大学広報のあり方等に関し、ブレインストーミングを通して意見発表を行うなどの意見を出し合いました。月2回開催し、講師は小生が当り、半年間実施しました。また、大学院異文化コミュニケーション学研究科の設置申請業務については、設置申請書の作成及び文部科学省との折衝対応は大学院設置担当教員、事務職員（企画推進課）が担当し、迅速に対応し認可を得ました。さらに私立学校法の一部改正に伴い理事会、監事の業務改革を行い、幹事の権限強化と理事会等への出席義務化の業務推進を図りました。また、理事長の権限の強化と理事会の業務の迅速化を図り、理事の職務権限を明確にするため常任理事会が設置されました。

以上、これらの業務の推進に当っては、理事長、学長をはじめ関係教員及び事務職員の協力・支援によって実現できたことに心から感謝申し上げます。因みに大学改革は、一朝一夕でできるものではなく、学生の目線に立ち、教職員、学生、同窓会が一体的になって魅力ある大学づくりに邁進することを期待したい。

2012年度人事（2012年4月1日～2013年3月31日）

◆沖縄キリスト教学院大学・沖縄キリスト教短期大学学長

- ・中原俊明（任期：～2016年3月31日）

◆教育管理職

【任期：～2014年3月31日】

- ・人文学部長 金永秀（人文学部英語コミュニケーション学科教授）
- ・短期大学部長 大山伸子（短期大学保育科教授）
- ・宗教部長 金永秀（人文学部英語コミュニケーション学科教授）任期：～2013年3月31日
- ・教学部長 武村朝吉（学習支援センター准教授）
- ・入試部長 上原明子（短期大学総合教育系教授）
- ・キャリア開発部長 近藤功行（人文学部英語コミュニケーション学科教授）
- ・図書館長 内間清晴（短期大学総合教育系教授）
- ・国際平和文化交流センター長 本浜秀彦（人文学部英語コミュニケーション学科教授）
- ・大学院異文化コミュニケーション学研究科長 Randolph H. Thrasher（人文学部英語コミュニケーション学科教授）

◆沖縄キリスト教平和研究所長

- ・大城実（任期：～2014年3月31日）

◆沖縄キリスト教学院大学

【採用（4月1日付け）】

- ・神山繁實 特任教授（任期：～2013年3月31日）

【昇任（4月1日付け）】

- ・本浜秀彦 教授（准教授）
- ・A. David Ulvog 准教授（講師）
- ・新垣友子 准教授（講師）
- ・Christopher Valvona 准教授（講師）

【退職（3月31日付け）】

- ・Randolph H. Thrasher 教授
- ・本浜秀彦 教授
- ・伊波貴子 講師

◆沖縄キリスト教短期大学

【採用（4月1日付け）】

- ・幸喜徳子 英語科特任教授（任期：～2013年3月31日）

【昇任（4月1日付け）】

- ・柳田正豪 英語科准教授（講師）

【退職（2月21日付け）】

- ・James A. Ross 英語科講師

◆理事（常務理事）

【退職（12月31日付け）】

- ・仲門勇市

◆事務職員

【採用（4月1日付け）】

- ・東江幹夫 主任（任期事務職員⇒専任事務職員）
- ・内間貴士 書記（任期事務職員⇒専任事務職員）
- 【異動（4月1日付け）】
- ・城間勉 企画推進課主任（学長付主任）
- ・大城芳野 国際平和文化交流センター書記（入試課書記）
- ・上間里子 入試課書記（財務課書記）
- ・澤峠直子 企画推進課書記（国際平和文化交流センター書記）
- 【異動（9月1日付け）】
- ・金城雄彦 総務課長（キャリア開発課長）
- ・與那原馨 キャリア開発課長（総務課長）
- ・渡慶次智子 教務課長（入試課長）
- ・仲間未美 入試課長（教務課長）

沖縄キリスト教学院大学名誉教授称号授与

2012年6月1日、大城宜武 元人文学部英語コミュニケーション学科教授に、これまでの本学院への多大な功績を称え、沖縄キリスト教学院大学名誉教授の称号が授与されました。



寄付感謝報告

寄付へのご協力ありがとうございました。ここに感謝をもってご報告させていただきます。

寄付指定 (2012 年 1 月 1 日～ 12 月 31 日まで)

個人 (33 件 / ¥11,402,864) 団体 (37 件 / ¥14,595,658) 合計 (70 件 / ¥25,998,522)

施設設備資金		
同窓 / 在学生	2	605,000
一 般	3	1,015,000
団 体	3	420,000
宗 教	1	3,000
宗教団体	7	163,000
学校関係者	4	175,000
教職員	3	1,864,000
同窓会	1	650,000
後援会	1	5,315,000
合 計	25	10,210,000

沖縄キリスト教平和研究所		
一 般	1	30,000
宗 教	1	50,000
宗教団体	2	15,000
学校関係者	1	10,800
教職員	1	2,340,000
合 計	6	2,445,800

奨学金		
一 般	1	100,000
企 業	9	580,000
団 体	1	100,000
宗教団体	1	300,000
学校関係者	3	270,000
教職員	5	2,560,000
同窓会	1	600,000
後援会	1	3,010,000
合 計	22	7,520,000

学生会活動援助費		
同窓会	1	300,000
後援会	1	200,000
合 計	2	500,000

その他		
一般	1	1,000,000
企業	4	2,500,000
団体	1	150,000
宗教団体	3	292,658
学校関係者	1	100,000
教職員	5	1,280,064
合 計	15	5,322,722



2011 年度決算報告

2011 年 4 月 1 日から 2012 年 3 月 31 日まで

資金収支計算書

(単位：円)

資金支出の部		資金収入の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
人件費支出	634,567,951	学生納付金収入	752,134,000
教育研究経費支出	204,249,071	手数料収入	19,299,300
管理経費支出	50,370,674	寄付金収入	32,081,208
借入金等利息支出	3,822,684	補助金収入	164,860,707
借入金等返済支出	36,100,000	資産運用収入	12,461,572
施設関係支出	10,426,956	事業収入	3,574,068
設備関係支出	43,031,360	雑収入	30,569,524
資産運用支出	70,001,213	前受金収入	335,711,930
その他の支出	63,098,919	その他の収入	71,507,219
予備費			
資金支出調整勘定	△ 38,758,678	資金収入調整勘定	△ 394,577,457
次年度繰越支払資金	1,121,352,656	前年度繰越支払資金	1,170,640,735
支出の部合計	2,198,262,806	収入の部合計	2,198,262,806

貸借対照表

(単位：円)

資産の部		負債の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
固定資産	3,359,097,419	固定負債	444,311,776
有形固定資産	2,942,033,345	流動負債	423,568,346
土地	943,772,604	負債の部合計	867,880,122
建物	1,251,498,532	第 1 号 基本金	3,866,733,729
その他の有形固定資産	746,762,209	第 2 号 基本金	60,000,000
その他の固定資産	417,064,074	第 3 号 基本金	30,000,000
流動資産	1,153,620,859	第 4 号 基本金	67,000,000
現金預金	1,121,352,656	基本金の部合計	4,023,733,729
その他の流動資産	32,268,203	翌年度繰越消費支出超過額	△ 378,895,573
資産の部合計	4,512,718,278	負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計	4,512,718,278

消費収支計算書

(単位：円)

消費支出の部		消費収入の部	
科 目	金 額	科 目	金 額
人件費	625,371,330	学生納付金	752,134,000
教育研究経費	299,685,313	手数料	19,299,300
管理経費	59,421,906	寄付金	33,098,136
借入金等利息	3,822,684	補助金	164,860,707
資産処分差額	3,222,896	資産運用収入	12,461,572
予備費		事業収入	3,574,068
		雑収入	30,569,524
消費支出の部合計	991,524,129	消費収入合計	1,015,997,307
当年度消費支出超過額	61,463,402	基本金組入額	△ 85,936,580
前年度繰越消費支出超過額	317,432,171	消費収入の部合計	930,060,727
翌年度繰越消費支出超過額	378,895,573		

2011 年度決算について報告いたします。

計算書類は、文部省令「学校法人会計基準」に基づいて作成されており、資金収支計算書は、当該会計年度の研究及びその他諸活動に使用したすべての資金収支の内容等を明らかにしたものです。

消費収支計算書は、当該会計年度の消費収支内容及び均衡の状態を示し、学校法人の経営状態を明らかにしたものです。

貸借対照表は、当該会計年度決算時点における財政状態を明らかにしたものです。

沖縄キリスト教学院 2013 年度 前期公開講座 受講生募集

講 座 名	講 師 名	開設予定日／時間	対 象 (定 員)
ハングル読解初級	金 永秀 本大学教授	4/22 (月)～7/8 (月) 10 回 19:00～20:30	ハングルをある程度読める方 (12 人以上)
世界の貧困解決のために 私たちができること	新垣 誠 本大学准教授	4/26 (金)～7/5 (金) 10 回 19:00～20:30	中学生以上 (20 人)
「ひとつならぬ」という感性を磨く 渚のお話と朗読・群読講座	上原 明子 本短期大学教授 名和 純 ゆり上げ貝ミュージアム	4/23 (火)～6/25 (火) 10 回 19:00～20:30	一般社会人、学生 (15 人)
人形劇入門	桑江 純子 本短期大学元非常勤講師	5/14 (火)～6/11 (火) 5 回 19:00～20:30	一般社会人、学生 (30 人)
小学校・児童英語指導者養成講座(初級コース) -Communicative Childcare English の基礎 - 児童英語発達段階に沿った指導の展開	山里 米子 NPO 法人沖縄児童英語研究会理事長	4/23 (火)～6/25 (火) 10 回 19:00～20:30	一般社会人、大学生、保育士、 幼稚園教諭、小中学校教諭、児童英語講師 (12 人以上)
Intro to American Culture 体感するアメリカ文化 国際的な感覚を身につけよう	グラント オスターマン 本短期大学元非常勤講師	4/24 (水)～5/22 (水) 5 回 19:30～21:00	一般社会人、学生 (12 人以上)
イタリアが生んだ巨匠たち I (プッチーニ)	マルコ・マッセターニ イタリアンカルチャー倶楽部講師	4/26 (金)～5/31 (金) 5 回 19:00～20:30	一般社会人、学生 (12 人以上)
英語で学ぶ太極拳	ブランドン ヘインズ カンフー・太極拳インストラクター	4/24 (水)～5/22 (水) 5 回 19:00～20:30	一般社会人、学生 (25 人)
こころスッキリ! からだリラックス! 「ボイスササイズ 10」	城間 里佳 ラテンパンドカチンパ 1551 ボーカル サンタモニカプロダクション&ミュージック 音楽部門責任者	4/23 (火)～6/25 (火) 10 回 19:30～21:00	一般社会人、学生 (30 人)

- 申込方法: 1) お電話でお申込みください。
電話番号: 098-946-1240 (総務課)
2) FAX でお申込みの方は、HP 掲載の申込書をご利用になり、氏名等を記入し、下記宛に送信してください。
FAX: 098-946-1241
3) E-mail でお申込の方は、HP 掲載の申込書をダウンロード後、氏名等を入力し、下記宛に添付して送信して下さい。
E-mail: koukaiko-za@ocjc.ac.jp
●定員に達し次第締め切らせていただきます。
- 受付期間: 3/4 (月)～3/29 (金) まで ※時間 9:00～17:00 (土日除く)
- 受講費用: <10 回> 一般 6,200 円 / 割引 3,200 円
<5 回> 一般 3,200 円 / 割引 1,700 円
●本学関係者・在学・卒業生、西原町在住者・勤務者、学生の方は割引あり。
●一旦納入された受講料は払い戻しできません。
- 納 入 先: 各講座開講当日、開講時間 10 分前までに総務課窓口で納入してください。
- 開講条件: 受講者の人数が少ないクラスは閉講することがあります。
- 日 程: 諸事情により、講座日程が変更になる場合があります。
講座が開始されましたら、担当講師にご確認下さい。
- 詳 細: 詳細は、本学のホームページをご覧ください。http://www.ocjc.ac.jp

Open Campus 2013

★★★三つ星オープンキャンパスへいらっしゃい!

開催日程

第1回 5/25 (土)

第2回 6/22 (土)

第3回 7/27 (土)

※諸事情により日程を変更する場合があります。

お問い合わせは入試課へ
TEL: 098-945-9782

入試相談・体験授業・キャンパスツアーなど、キリ学・キリ短の
キャンパスライフを体験! 多くの方のご参加をお待ちしております。
(高校1・2年生、保護者、一般の方、どなたでも自由に参加できます。)



入試相談会および授業見学会

- 2012 年度から始めた入試相談会を継続して実施します。
- 前日まで受け付け、Bridge Program や授業見学 (5 時限) を開催します。
- 入試課スタッフが入試、カリキュラム、海外留学などのご質問、学費、奨学金について保護者様の疑問にお答えします。

10 月以降、高校 1、2 年生対象の
入試相談会 & 授業見学会を随時実施予定!

